

2023 年度

国 語  
(1 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

清泉女学院中学校

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いにそれぞれ答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号もふくみます。)

筆者は父親の仕事の関係で、小学校の低学年の時に現在のチェコ共和国の首都プラハで生活することになりました。筆者が通うプラハの小学校は、ロシア語学校であり、授業のすべてがロシア語で行われていました。しかし、小さかった筆者はほとんど初歩的なロシア語しか話せないまま、ロシア語学校に通うことになりました。次の文はそうした経験をした筆者が考える子どもたちの言葉の習得やコミュニケーションについての文章です。

人がことばと出会うのはいつなのでしょう。自分がいま日常的に使っていることばを、いつどのようにして獲得したのかについて、はつきりした記憶を思い起こすのは大変難しいことです。とりわけ、自らの言語獲得の最も初期の過程については、親が詳細な記録でもつけていない限り通常は知ることができません。

このもどかしさは、記憶それ自体の主要な部分が、ことばに負うところが大きい、ということにもかかわっているのではないのでしょうか。知覚感覚的な経験は、ことばの力を借りなくても記憶に刻まれているものですが、知覚感覚的な経験それ自体を思い起こすことは、もう一度その経験の中に入り込み、それを生き直すことです。対象化することは困難です。記憶をその引き出しから自由に出し入れするためには、それを終わりと始まりがさだかでないような知覚感覚的印象から、いったんことばによって切り離して枠組みを与え、あるまとまりをもった出来事としての他の経験から切りとり、一定の形をもったものしておく必要があります。

その意味で、人がまだ十分に自らの経験を言語化する能力を持っていない時期の記憶、個人差はあるとしても、言語能力を獲得しはじめる一歳からのおおよそ三歳ぐらいまでの記憶は、私たちにとってきわめておぼろげで、明瞭さを欠いたものにならざるを得ないのです。ですから、私たちが自身がどのようにことばと出会い、それを使いこなせるようになったかということが記憶の中に残ることは、残念ながら、きわめて稀なこととならざるをえません。



私の場合、幼少期に、それまで親や家族や社会の中で習得しつつあった、通常「母語」と言われている言語とは異質な言語の中に投げ入れられたために、「母語」を習得するときとそれなりに類似した過程を、一定程度自覚的に記憶に残す形で保存しておくことができました。

④ プラハでの暮らしの当初は、ほとんど非言語的な世界につき落とされたような印象でした。なにより問題だったのは耳の構造で、ロシア語で話される声を、ことばの単位となるような音声として聞き分ける耳を自分は持っていない、ということに唖然としました。とにかく、耳を澄まし、ロシア人の子どもたちが話しかけてくる声に、なすすべもなく応対する、という日々がしばらく続きました。

A、ことばに対する恐怖感のようなものは、わりとすぐに消えていきました。子どもの世界のありがたさで、ことばを介在させなくても身振りや手振りといった非言語的な記号、あるいは絵を描くことによつて、かなりの意思疎通ができることがわかってきたからです。ア

B、第一日目で一番困ったのは、トイレの場所がわからなかったことです。がまんの限界まできて、隣の子にしかたなく日本語(?)で「トイレ トイレ」と必死で訴えたのですが、相手はキョトンとしているだけ。たまらなくなつて立ちあがつて股間をおさえて足をバタバタさせると、ナンダというようにならずいて、トイレまで連れていってくれました。ロシア語でも「トイレ」のことは「トゥアレートゥ」と言うのですが、通じなかったのは、私が「エル」の発音を「アール」の音で発声していたからだだったようです。

クラスメイトたちは当初とても親切で、最初の一週間ぐらいは、カバンの中に入っている学用品の名前を指さしながら教えてくれたり、給食に出てくる食べ物の名前を一つ一つフォークで突き刺しながら教えてくれたりしました。C、現実世界に実在し、目で見ることができ、手で触ったり、舌で味わったり、鼻で嗅ぐことができるモノやコトをめぐることばに関しては、そうやって憶えていくことが可能でした。しかし、こ

とばの世界には、現実世界で確認できないことばの方が、はるかに多いことは周知のとおりです。そうしたことばの使い方を習得するには、とにかくロシア語を話しているクラスメイトの一举手一投足と、そこで発話されている音声との関係を観察し、耳をそば立てつづけるしかありません。

イ

おそらく「母語」を習得しはじめるときの、一歳以後の幼児たちも、きっとそのようにして、周囲の大人がことばを発する場面を、はかり知れないような注意力で観察し、どんなときに、どんな状況の中で、どんなことばが発せられ、その結果どんな事態が発生するか、といったようなことを、必死で捉え、記憶の中に書き込んでいたに違いありません。ある場面が使われたことばの意味を、大人たちが説明してくれるわけではありません。ことばの習得は、ことばの意味がわからなくても、とにかくそのことばを実践的に使ってみる体験からはじまるのではないのでしょうか。

自分の発したことは周囲の人々に受け入れられたなら、その使い方がまちがっていないかったことを知り、以後、そのような文脈の中で同じことばを使うようになっていくのではないかと思います。ウ

もちろん、子どもの世界では、大人の真似をすることに、多分に遊びや戯れ、あるいはじゃれあいの側面がありますから、さほど苦もなく、大人になってから考えると信じられないほどの複雑な認知操作ができるのだと思いますが、学齢期に達していた私の場合、ことばの使用方法をまちがえると、侮蔑的に嘲笑されますし、突然けんかごしになられたりもしたわけです。

クラスごとにオーバーやジャンパーを脱いでかけておく「着替え室」で、ある日の帰り際、同じクラスの男の子から「僕のオーバーがどこにあるか君、知らないか」と聞かれて、「知らない」という意味をこめて、「ダー」（ロシア語で「はい」ということば）と答えたのですが、いきなり「むこうはけわしい顔になって」「どこだ、どこだ」と騒ぎはじめ、こちらが「知らないよ」といっても、「さっきダーって言ったじゃないか」と胸ぐらをつかんでくるのです。

そのときは、いったい何かどうなっているのかまったくわからず、ただただ相手の剣幕におそれおのいていただけでした。しばらくして別の男の子が、「君のオーバーをまちがえて着ていつちゃったよ」と戻ってきてくれたので、その場はなんとかなったのですが、胸ぐらをつかんでいた男の子は、「じゃあ、なんで、さっきダーって言ったんだよ」と釈然としない様子でした。その日からしばらくしてわかったのですが、相手は否定形の文で「君、知らないか?」と聞いてきたのですから、私は、それに対して「ニエツ」（いいえ）と答えるべきだったのです。ロシア語の否定形は、動詞に「ニエ」をつけるだけで出来てしまいますから、そこに気をつけていないとだめだということもあります。否定形の内容に同意する場合には、否定の「ニエツ」で答えるという、文法の基本がわかっていなかったのが、失敗の要因でした。家で両親からロシア語を含む欧米語の特徴を教えてもらった後は、しばらく「ニエ」のついたことばが友達の口について出ると、ドキドキしてしまうような状態がつかまりました。

ロシア語を聞きとる耳を持つということは、単語を聞き分けるだけでは済まないのだ、ということもびんびんわかっていきます。ロシア語では、複雑な格変化があつて、そこにながりの情報量があり、かつ情報の質もそこで決まってくることもあつて、単語の語尾がどうなるかについてもかなりの間ドキドキせざるをえませんでした。その意味では、ロシア語をつかう子どもたちの世界において、一種生き残りをかけた闘いといったような緊張感があつたわけです。けれども同じような観点から、言語習得期の幼児のことを考えてみると、Yとはいえ、ことばなるものを

使用してコミュニケーションをしている大人や年長者の世界に、入れてもらえるかどうかの瀬戸際に日々立たされているわけですから、はかりしることができないほどの緊張の中で、やはり生き残りをかけた日々を子どもたちはおくらしている、というふうにとらえた方がいいのではないのでしょうか。 エ

おそらく、私たちは大人になってしまうと、あまりに抽象化された、「言語」という観念に縛られすぎることになるのかもしれませんが。英語ができない、フランス語ができない、ロシア語ができないということが、あたかも人と人が意思や感情を伝えあうことのできない、絶対的な条件であるかのように考えてしまいがちになっているわけです。

けれども子どもの世界では、ことはがうまく通じない場合、とにかく身のまわりにあるものや、自らの身体の機能を総動員して、なにがなんでも自分の意思や感情を相手に伝えようとします。「言語」を中心にして考えると「非言語」的と排除されてしまうような、身振り手振りをはじめ、実は信じられないほど豊富な、意思や感情の伝達手段が、私たちの身とそのまわりには存在しているのだと思います。

(小森陽一『コモリくん、ニホン語に出会う』より一部改変)

※1 意思疎通：コミュニケーション。相手に感情や意思を伝えること。

※2 嘲笑：馬鹿にして笑うこと。

問一 ——線①「はっきりした記憶を思い起こすのは大変難しいことです」とありますが、その理由について説明をした次の一文の空らんには、本文からぬき出したことばを入れて完成させなさい。それぞれ指定された字数を、本文の最初から☆の箇所までで探してぬき出すこと。

記憶の大部分は I 九字 が大きく、人がある記憶を引き出すためには、 II 三字 によって、その記憶を他の経験から切り離してまとまりを与える必要があるが、人が II を獲得し始める頃はまだ III 十三字 を持っていないから。

問二——線②「母語」と言われている言語」・——線③「異質な言語」とは筆者の場合、それぞれ何を指しますか。本文からぬき出して答えなさい。

問三——線④「プラハでの暮らしの当初は、ほとんど非言語的な世界につき落とされたような印象でした」とありますが、なぜ筆者はそのように感じたのですか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ロシア語がほとんど理解できずに、ロシア語を言語として認識することもできなかったから。

イ 日本人の耳とロシア人の耳では人体の作りが違い、ロシア語を聞き分けることが難しかったから。

ウ 筆者がロシア語を習得する頃には日本語をある程度理解しており、緊張感を持って学べなかったから。

エ 言語を理解できなくとも身振り手振りなどで意思疎通をすることが可能であったから。

オ ロシア語が聞き取れなかった筆者は、毎日のように学校で友人と問題を起こしていたから。

問四 A C に入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、それぞれ

れの記号は一度しか使えません。)

ア たしかに      イ もしも      ウ たとえば

エ なぜなら      オ けれども      カ つまり

問五——線⑤「ことを介在させなくても」かなりの意思疎通ができる」とありますが、それを具体的に言い換えた箇所を「——線 a ~ d の中から一つ選び、記号で答えなさい。」

問六 

X
---

・

Y
---

にはどのような文が入りますか。それぞれもつともふさわしいものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

X ア さらに苦もなく行うことができました

イ かなり抑圧よくあつが強くなりました

ウ より複雑な認知操作ができました

Y ア まだことが分からない

イ 子どもの世界の残酷ざんこくさがある

ウ 遊びの要素がある

問七 —線⑥「失敗の要因でした」とありますが、なぜそのような失敗をしたのですか。次の中からもつともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア ロシア語で「知らない」という意味は「ダー」ではなく「ニエツト」だと知らなかったから。

イ 日本語と違いロシア語では相手の質問に同意するときには否定形で答えることを知らなかったから。

ウ 否定形で質問されたときの答え方が日本語とロシア語で違うことを知らなかったから。

エ ロシア語では動詞に「ニエ」とつけるだけで否定形になるということを知らなかったから。

オ ロシア語の格変化が複雑であり、単語の語尾にも意味があるということを知らなかったから。

問八 筆者は子どもと大人の意思疎通のちがいについてどのように説明していますか。八〇字以上一〇〇字以内で説明しなさい。

問九 本文には次の一文が抜けています。どこに入ればよいですか。本文の 

ア
---

～

エ
---

の中から選び、記号で答えなさい。

ことが発せられる一つ一つの場面に対して、異様に敏感びんかんになり、細かな観察(聴)をくせする癖がつかまりました。

問十 次の中で本文の内容に合うものには○を、合わないものには×を書きなさい。

ア 筆者はロシア語がよく理解できなかったため、プラハで緊張感をもって日々を過ごしていたのだが、その緊張感は「母語」を学び始めた幼児にも共通するものである。

イ 筆者のように子供のときに「母語」以外の言語で育つと、「母語」の環境かんきょうで育った人間と比較ひかくして、ことばを覚え始めた時のことを記憶として持つことがより困難である。

ウ 「母語」を学び始める子どもは、大人たちがことばをどのように使っているかを知り、今度は自分でも実践的にそのことばを使い、周囲がそれを受け入れるかどうかを観察している。

エ 子どもの頃にプラハで過ごした筆者は、「母語」以外の言葉を習得する必要があり、普通ふつうの幼児とは違う方法で言葉を習得していくしかなかった。



〔一〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

高校生のぼく(テツロー)はある日の夕暮れ、ホームレスの老人であるトクさんに話しかけられた。トクさんと話している中で彼の考え方に惹かれたテツローは、トクさんの「時折話し相手になってほしい」という頼みに応じ、友人も連れて行くことにした。

つぎにぼくが河川敷にいったのは二日後のこと。そのときはジュンとナオトがいっしょだった。ダイは定時制の高校にいつているので、その回はパス。手ぶらでいくのがなんとなく気が引けて、コンビニでポテチの徳用袋とミネラルウォーターを買った。今度の天気は曇り空で、冷たい風が川下から吹いていた。

ぼくがトクさんのいったことを、すこし派手にして話したので、素直なナオトなんかは、A トクさんのことを放浪する哲学者だと思いきんでいた。ジュンは頭のいい分当然懷疑的で、あまり信用はしていなかった。でも、おもしろいと感じていたのは確かだ。

ぼくたちはトクさんの座るベンチのまえを、三人で丸くかこんで地面に腰をおろした。なんとというかキリストの教えを乞う若い使徒みたい。隅田川の対岸にはガラス張りの聖路加ツインタワーが、未来の聖堂のように空にそびえている。

「あの、基本的なことから質問していいですか」  
ジュンのこまっしゃくれた声だった。

「どこに住んでいるんですか。あの場所という意味でなく、どんな家なんですか」

ホームレスの哲学者は気負わずにいった。

「テント。最近ではホームセンターで、軽くて折りたたみの簡単なやつが売ってる」

「なんだ、ぼくたちと同じじゃないですか」

そういったのはナオトだった。中学二年生の終わりに、ぼくたちが新宿の公園で野宿したときと同じなのだ。親近感がわいてくる。

「それだな、気に入った場所に移動しながら、暮らしているんだ。今は秋だから、まだ東京のこのあたりにいるが、もうすこし涼しくなったら九州の南のほうとか、沖縄に行く。むこうにしりあいもあるしな。旅から旅の暮らしだ」

ナオトの目が輝いた。

「いいなあ、だったら夏は北海道ですね。ぼくは病気の関係で、アウトドアライフって禁止されているんです。うらやましいな」

そういうナオトはひとりだけ薄塩味のポテチだった。早老症で濃い味つけも、日焼けもとめられているのだ。ぼくとジューンはぴり辛のバーベキュー味。

「いや、別にたいしたことはない。ただおれが一カ所にずっと腰を落ち着けるのが苦手なだけなんだ」

ジューンが銀縁メガネの位置を直していった。

「家族とかはいないんですか。奥さんとか、お子さんとか？」

トクじいは辛抱強く笑顔を保ったままだった。

「少年のおとうさんの年収はいくらだ？ 家族の話は関係ないだろう」

厳しい拒絶の言葉だった。けれど、ジューンはそれが逆に好印象だったようだ。

「よかった。なんだか家族の話で泣かされるの、嫌だなあって思っていたので。故郷に残してきた孫に会いたいか。はずしちやって、すみません」

② ひねくれ者が急に素直になった。

「少年たちは、みんな、自分の居場所がないんじゃないかって心配なんだったな」

それはぼくが前回、別れ際に話したことだった。ナオトもジューンも、ぼくと同じであることはわかっていた。なぜなら、将来のことや自分の就きたい仕事については、誰も口にできないほど怖がっていたからだ。河川敷の公園の空気が急に真剣になる。

「だがな、③ そいつは心配いらぬぞ。不思議な話だが、この世界には人の数だけ、うまい隠れ家があって、誰でも自分なりの場所が見つかるものなんだ。会社とか組織が好きなのやつは、そういうところにいけばいい。そうでないやつは、ひとりで仕事をしていいし、あまり人と会わない仕事ってのもちゃんとある。少年たちの親や学校の先生が悪いんだな。絶対に世のなかのいうことをきかなければいけませんなんて、教えるから」

ジューンがミネラルウォーターをひと口飲んでいった。

「だけど、実際にはこの日本で、どこの組織にも属さずに生きてはいけませんよ？」

「いいや、できる。うまく距離をおきながら生きることは誰にでもできる。大事なものは、どうやって距離をつくるかってことだな。あのな、旋盤の刃をバイトっていうんだが、あまり材料に強く押しつけすぎると、いくら油で冷やしても熱をもってなまっちゃうんだ。相手をきちんと削るとはできるが、こちらはあまり削られない。そういう距離を自分なりに見つけるといいのさ。相手が会社でも、家族でもな」

ナオトは不思議そうにいった。

「でも、そんなふうになっていると、苦しくなりませんか。普通に会社のために一生懸命働いたり、家族を大切にしていなかよく暮らしたほうがいいと思うけど」

トクさんはうなるようにいった。

「それは確かにそうだ。少年のいうとおり。だがな、そいつができるのはダイヤモンドみたいに硬い心をもってる人間だけだ。いいか、会社とか家族とか、人が何人か集まると、その構成員にだな、組織のほうはでたらめなことを要求するんだ。自分のすべてをさしだせとか、一生家族のために働けとか。暮らしの安全を保障する代わりに、人間は組織につかい潰されていく。それに耐えられるのは、恐ろしく強いやつだけだ」

ぼくは自分の父親と母親のことを考えた。そうすると、うちの両親はふたりともダイヤモンドの人間ということになる。

「だったら、世界のほとんどの人は、恐ろしく強い人間なんですな」

放浪する哲学者はうなずいた。

「そうだ。あるいは、ダイヤモンドみたいに鈍感なのか、どっちかだな。だから、こうしてベンチのまんなかになに仕切り板をつけるようになる。自分たちといっしょにつかい潰されない人間を嫌ってな」

ぼくは対岸の築地・銀座の景色を眺めた。どの高層ビルもガラスでできた、恐ろしく清潔なアリの巣に見えてくる。ジュンは  
B  
頭がよ  
かった。

「でも、組織のなかにも、自分をなくさない人はいますよ。演技がうまい人、心の奥までは縛られない人がね」

トクさんは笑っていた。こんなふうにはくたちと話すのがたのしくてしかたなかったのかもしれない。

「そうだ。だから、うまく距離をとるのが大切なんだ。この国で生きていくってな、台風みたいな集団の力から、どれくらい距離をおくといいかってことを一生考えていくってことなんだ。ずっばりはまって台風の中心にいてもいい、なるべく嵐のとどかない端っこにいてもいい。自分が

落ちて着ける気もちのいい距離を見つける。そいつが生きるコツだな」

ジュンもナオトも心を動かされたようだった。ほくはトクさんから視線を移し、すっかり夜の色に染まった曇り空を見あげた。ほくは将来どんな形で、この不可解な世のなかと折りあいをつけていくのだろうか。分厚い雲のしたには、東京のビル群が砂漠の砂粒さばくのように広がっている。

「なあ、少年」

トクさんがほくのほうをむいていった。

「自分がなんの仕事をしたいかではなくて、逆に自分にとって気もちのいい距離で働ける仕事はなにか探してみたらいいのかもしれない。給料よりも、出世よりも、自分の心の寸法があうってことのほうが大事だ」

ジュンが苦しそうにいった。

「だけど、日本はそんなに甘くないですよ。大学を卒業するときに新卒採用のゴールデンチケットをつかかなければ、下手したら一生フリーターです。一回限りの採用試験で、そこで失敗したら終わりなんです。二度目のチャンスはないし、いいわけもできない。距離でも、寸法でもいいけど、ずっと貧乏びんぼうじゃ家族だつてもてないし、劣等感れつとうかんを抱えたままでしょう……秋葉原のKみたいに」

ほくもあの通り魔事件は恐ろしくてしかたなかった。もちろん被害者にはたいへん気の毒に思う。でも、恐ろしかったのは、いつか自分もあの犯人のように、この世界に絶望する日がくるんじゃないかということだった。

「メガネの少年はなかなか頭がいいみたいだが、その話は誰にきいたんだ」

ジュンはこたえに困っていった。

「大企業の正社員の生涯賃金は平均で二億五千万。対してフリーターは同じように働いて、約九千万円。新聞でも、テレビでもやっていますよ。日本の常識です」

トクさんはねばり強かった。抑えた声でいう。

「だから、少年は大企業にはいらないのか？」

⑦ すぐには言葉がでてこないようだった。ジュンはしほりだすようにいった。

「すくなくとも、うちの親はそうするようにいっています。うちは普通のサラリーマンの家だから、自分で勉強してがんばって。そこまでしか、

ぼくにしてくれることはないそうです」

それで毎年東大に百五十人以上も合格する進学校にジュンはいったのだろう。もともと頭はよかったけれど、親の期待にこたえたかったのだ。「だが、少年はいい学校にいき、おおきな会社にはいるだけの生きかたが信じられないでいる。そうだな」

ジュンはうんざりした声でいった。

「一流大学に大会社、あとはがんばって働いて、人よりすこし偉えらくなって、すこしたくさんの給料をもらって、終わりになる。そんなことなのに、ぼくはほんとにいるのかな。ずっと我慢がまんして、我慢して、それでいつか死んでしまう。それが生きることなのかな」

ナオトもぼくも、身動きができなくなってしまった。ジュンの声には静しずかな絶望ぜつぼうがあつたからだ。

「わかるか、親は愛しているとって、子どもを縛る。会社は守ってやるといって、命をさしだせという。ほんとの大人になるといのは、愛情だの安全だの常識だのから、自分なりの距離をとれるようになることだ」

ナオトの声は悲鳴のようだった。

「ちょっと待ってください。誰よりも自分のことを好きになってくれる人だとか、自分のためになにかも捧たもげてくれる人からも、距離をとらなくちゃいけないんですか」

ぼくにはナオトが誰のことをいつているのか、C わかった。ナオトのお母さんだ。二十四時間看護師も顔負けで、ナオトが生まれたときから、ひとり息子の遺伝子の病氣びやうきと闘たたかっている。ジュンも気もちも同じだっただろう。ぼくの顔をちらりと見たのだから。

トクさんはベンチのうえで、上半身をゆらゆらと前後に揺ゆらし始めた。この人でもつらいのかもしれない。

⑨「そういう愛情にこたえないというのも、立派な感謝のあらわしかたかもしれない。だって、少年はいつかひとり生きていくんだろう。その誰かから、離はなれてな」

ナオトはうなずくと、そのままうなだれてしまった。トクさんは跳とびあがるようにベンチを立つと、植えこみに駆かけだした。

「ちょっと、シヨンベン」

ツツジの植えこみのむこうから水音がした。トクさんの声がコンクリートの堤防ていぼうに反射して、D おおききこえる。

「すまん、なんだか年をとるとシヨンベンが近くて。おい、これからみんなでもんじゃでもくいにいかないか。少年たちはみな、今夜は帰りました

くないって顔してるぞ」

ぼくたち三人は顔を見あわせた。確かにこんな気分のまま家に帰って、親と夕飯をたべるなんて限界を越えている。ジュンがいった。

「だったら、いつもの作戦でいくか」

スカイライトタワーにあるナオトの家で勉強をして、そのあとディナーをご馳走になる。ぼくの家でも、ジュンの家でも、それなら文句をいわれることはなかった。

「じゃあ、ぼくはジュンに数学の宿題を教えてもらうってことでいいか」

「いいよ」

そこでぼくたち三人はそれぞれの携帯電話をとりだして、親に電話をしたのだった。トクさんといっしょに裏通りを抜けて、定番のヒマワリにいった。ぼくたちはサイダー、トクさんはビールで乾杯した。

その夜は閉店時間まで、ずっとねばったのだけれど、ひとつだけ不思議なことがあった。この老人は十六歳のぼくたちのいうどんなでたらめでも、決してひとりで否定しないのだった。かならずいっしょに考えてくれる。どうやったら、厚生年金をもらう年になるまで、こんなふうにはやわらかな頭と感覚を残せるのか。

それがぼくのその夜一番の不思議だった。

(石田衣良『6TEEN シックスティーン』より一部改変)

※ 定時制の高校：夜間やその他特別な時間、または時期において授業を行う高等学校。

問一 







 に入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、

それぞれの記号は一度しか使えません。)

- ア まったく    イ やけに    ウ かなり    エ さすがに    オ よく    カ だんだんと    キ すっかり

問二 — 線①「腰を落ち着ける」とは「ある場所に落ち着く」という意味の表現です。このような体の部位を用いた表現は日本語に数多く存在します。次の(1)～(5)の表現の  に当てはまる体の部位をそれぞれ答えなさい。

- (1)  が黒い 意味…心がねじけていて悪事をたくらむ性質であること。
- (2)  が上がらない 意味…引け目を感じて対等な関係に立てないこと。
- (3)  に唾をつける 意味…怪しい、疑わしいものにだまされないよう注意すること。
- (4)  が回らない 意味…借金など、支払うべきお金が多くてやりくりがつかないこと。
- (5)  先三寸 意味…口先だけでうまく相手をあしらうこと。

問三 — 線②「ひねくれ者が急に素直になった」とありますが、急に素直になったのはなぜですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ジュンは出会う前はトクさんのことを信用ならない人物であると用心していたが、自分の知りたいことについてしっかりと答えてくれた彼のことを信用できる人間であると考えを改めたから。
- イ ジュンはトクさんのことを信用していなかったため、彼を試すようなことを言ってみたが、その対応がジュンにとって好ましかったので彼を信用できる人間であると思ったから。
- ウ ジュンはナオトとは違い、テツローの話を聞いてトクさんの人間性について疑問視していたが、実際に彼と話してみると物事について深く考えている自分好みの人間であると分かったから。
- エ トクさんはテツローの友人が来てくれると楽しみにしていたにもかかわらず、ジュンが無礼な質問をしてきたため不快に思ったが、ジュンがすぐに謝ったため機嫌を直したから。
- オ トクさんはナオトからされるどうでもいいような質問に答えることに飽きてきていたが、ジュンが自分の立場を思い起こさせるような質問をしてきて自分の行いを正そうと考えたから。

問四 — 線③「そいつ」とありますが、これが指す内容はなんですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今まで感じてきた幸せが本当に幸せだったのかということ。

イ 今までの生き方が正しいものであったのかということ。

ウ 将来どこに住んで生活していけばよいのかということ。

エ 将来自分がどのように生きていくのがよいのかということ。

オ 正しいと思っていたことが間違いだっただのではないかということ。

問五 — 線④「そういう距離」とありますが、そういう距離をもって働くとは会社員の場合、どのような働き方ですか。三〇字以上四〇字以内で説明しなさい。

問六 — 線⑤「恐ろしく清潔なアリの巣に見えてくる」とありますが、これはどのようなことを表していますか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア その高層ビルはダイヤモンドのようにきらびやかでも清潔な反面、アリの巣のように入り組んださまざまな思いを抱えた人々がいるとテツローが感じていること。

イ その高層ビルはアリの巣のように整然と秩序だちうじよって構成されており、一見きれいに見えるが、アリの巣と同じように奥おくの方はどうなっているか分からないとテツローが思っていること。

ウ そこで働いている人々はダイヤモンドのような美しさと強さを持っており、また、巣を作るアリのように真面目に働いており、このような人が組織を支えているのだとテツローが感じたこと。

エ そこで暮らしている人々が身の回りのことに気をつかいながら、規律に従って行動することで、さまざまな仕事が達成されていく様子がアリの巣作りのようであるとテツローが感じたということ。



オ そこに住んだり、働いたりしている人々がその場にふさわしくないものを排除し、アリのように何も考えず命令に従って整然と動いているだけのようにテツローには思えてきたこと。

問七 — 線⑥「自分が落ち着ける気もちのいい距離を見つける」とありますが、「気もちのいい距離」を保てる場所をトクさんはどのようにたとえていますか。本文から六字でぬき出して答えなさい。

問八 — 線⑦「すぐには言葉がでてこないようだった」とありますが、ジュンがすぐに言葉を出せなかったのはなぜですか。もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今まで親から言われてきた生き方を信じて努力してきたが、果たしてその生き方は本当に幸せなのだろうかと疑問が生じてきていて悩んでいたから。

イ 今まで大企業に入らなければならないと考えていたが、トクさんと話す中でその考え方が間違っていたと分かり、大企業に入らない方がいいと思いはじめたから。

ウ ずっと親の言うことに従って生きてきたが、どうせ最終的に死ぬのであれば自分の好きに生きるのもいいかもしれないと考えが変わってきたから。

エ ずっと親の期待にこたえようと頑張ってきたが、どんなに頑張っても些細なきっかけで劣等感を抱え、世界に絶望するのではないかと不安になったから。

オ ずっと親に言われた通りに生きてきたが、そのような生き方にうんざりしてきており、これからはもう親の言いなりにはならないと決意をしたから。

問九 — 線⑧「静かな絶望」とありますが、これはどのような絶望ですか。説明しなさい。

問十——線⑨「そういう愛情に、かもしれない」とありますが、愛情にこたえないことが感謝をあらわすことになるのはなぜですか。もともと

ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 愛情を与えてくれる存在はその愛によって行動などを制限してくるので、そのような存在から自ら離れて距離を取ることで親子共に幸せに生きることができから。

イ 愛情を与えてくれる存在から自分の意思で離れることで、お互いに相手を削れるが自分は削られない程よい距離になることができ、それがお互いのためになるから。

ウ 愛情を与えてくれる存在から自分なりの距離をとれるようになることが本当に大人になるということであり、その様子を示すことで安心させることができるから。

エ 愛情を与えてくれる存在からはいつかは離れなくてはならないため、自分が誰にも経済的に頼らず生きていけることを見せることが親への恩返しになるから。

オ 愛情を与えてくれる存在への感謝はさまざまな形で表すことができるが、それらの中でも自分が大人になったことを示すのが親にとって一番よいものだから。

〔三〕

次の――線について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① 道路ヒヨウシキは守らなければならない。
- ② キカイ体操の選手が金メダルを取る。
- ③ 彼女の優れた点はマイキョにいとまがない。
- ④ 海をノゾむレストランで食事をする。
- ⑤ どうにかお金を工面することができた。
- ⑥ どこからか快い音色が聞こえてくる。

